

# 弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

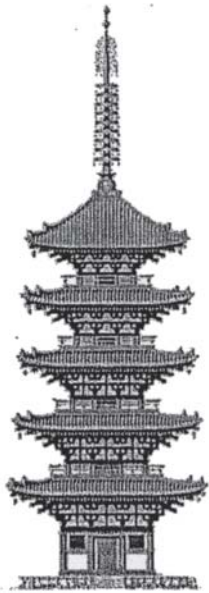
皆さん、こんにちわ。日本仏教と聖徳太子の生涯がテーマの今年のかかわら版。今月はいよいよ日本への仏教伝来です。

## ★ 継体天皇

先月号では、四七八年、二十一代雄略天皇が中国への朝貢外交に終止符を打ったことをお伝えしました。

この頃の倭は大和朝廷が確立する時期。地方に有力な豪族が多く、中国や朝鮮のような中央集権的な律令国家にはなっていませんでした。

雄略天皇を継いだ二十二代清寧天皇には子がなく、雄略天皇の従弟の子が二十三代額宗天皇、二十四代仁賢天皇として即位。そして、二十五代武烈天皇は仁賢の子。ここまでは十六代仁徳天皇の血筋です。



しかし、武烈天皇にも子がなく、大和朝廷は皇統断絶を危惧。そこで、仁徳天皇の父に当たる十五代応神天皇の子孫(五世)、男大迹(おおと)を探し出しました。

越前で暮らしていた男大迹は、大伴金村の説得に応じて二十六代継体天皇(五〇六〜五三二年)として即位。「継体」は皇統を継ぐという意味です。

## ★ 磐井の乱

当時の大和朝廷は、朝鮮半島で高句麗、新羅、百濟、任那の争いに関わっていました。

五十八歳で即位した継体天皇。百濟と同盟を結び、新羅への出兵を計画。

それを察知した新羅。九州北部の豪族、磐井(いらい)と結託し、朝鮮半島遠征のために九州にやってきた大和朝廷軍を立ち往生させました。

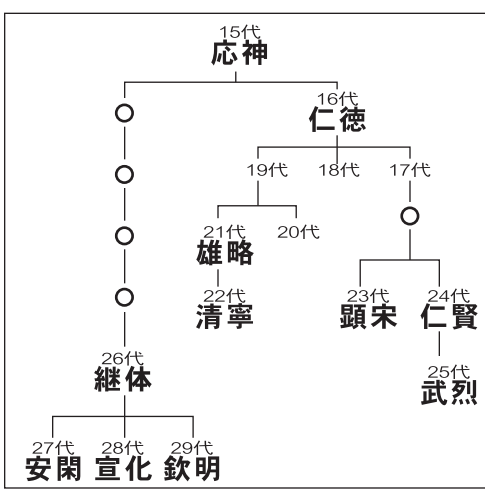
継体天皇は自ら出陣。一年半かけて磐井の乱(五二七年)を鎮圧しました。各地の有力豪族、巨勢(こせ)、

大伴、物部などが、継体天皇の武功と力に一目置くようになり、この時代に大和朝廷の支配が強化されました。このように、当時の倭は朝鮮半島と密接に係り、本格的には高句麗・新羅連合軍と倭・百濟・任那連合軍が対立する構図。

こうした交流の中で、朝鮮半島から非公式に仏教が伝搬。最も古い記録として、五三三年(継体十六年)、扶桑略記に「唐人、仏像を持ち来た」という記述が見られます。

## ★ 欽明天皇

継体天皇の没後、三人の子が皇位を継承。二十七代安閑天皇、二十八代宣化天皇、二十九代欽明天皇です。



応神天皇から継体天皇に至る系図

五三八年、百濟の聖明王から欽明天皇に仏像(小金銅仏)・仏具・経典などが贈られ、仏教が公式に伝えられました。日本への仏教伝来です。

当時の仏教は、言わば最新の大和文化。百濟が倭との同盟強化を目指した貢ぎ物と言えます。昨年十二月号でもお伝えしましたが、贈られた仏像は蕃神(あだしくにのかみ)、大唐神、他国神、仏神と呼ばれました。当時の倭の国神は八百万神(やおよろずのかみ)。つまり、仏像は大陸から伝わった異国神です。

欽明天皇を支える二大重臣は大伴(おおとみ)の蘇我稻目(いなめ)と大連(おおむらじ)の物部尾輿(おこし)。

国神祭祀を司る天皇が異国神を拜むわけにいかず、仏像と経典は蘇我稻目に下賜。ここに仏教に寛容な崇仏派蘇我氏と、否定的な排仏派物部氏の対立がスタート。背景には二大重臣の勢力争いも影響していました。

## ★ 仏法の初め

日本書記は五八四年を「仏法の初め」と記しています。来月は異国神を祀る仏教がどのように日本に受け入れられていったかをお伝えします。乞ご期待。

